

転生無双^{なんて}
大層^{なこと}、できるわけ
ないでしょう!

公爵令息が家族、

友達、精霊と送る仲良しスローライフ

Daidaikichimaru Kouunji
幸運寺 大大吉丸

Illustrator
月森もち



マーク

ラインハルトの護衛であり
兄貴的存在。
お調子者なところがある。

アルバート

ラインハルトを幼少期から
支える護衛の一人。
礼儀作法に厳しい。

エドワード

ラインハルトの父。
極度の親バカだが、
数多くの武勇伝を持つ。

ルイ

ラインハルトと行動を
ともにする伯爵家令嬢。
研究が大好き。

ルーカス

やんちゃで
悪戯好き。

ソフィア

ものづくりが
得意。

従魔の精霊たち

ラトリア

精霊たちのまとめ役。
全ての属性の
魔法が使える。

ラインハルト

公爵家長男に転生した
本作主人公。
知らないうちに規格外の
能力を獲得していたが、
制御に困っている。

ラピス

人懐っこい性格の
フェンリルの子ども。

登場人物紹介

プロローグ

「ようこそ〜！」

いつからだろう？

気づくと俺はこの場所に立っていた。

目を開けると、正面には、深緑色の髪に透き通るようなエメラルドグリーンの目をした女性がいた。

——ゴクリッ。

あまりの美しさに思わず息を呑む。

だが冷静になつてよく見ると、目の前の女性、格好が残念すぎる……

なにその変なTシャツ？ しかも、胸のあたりに“生命神ライフ”と書かれたガムテープが貼られている。もしかして、それってあなたの名前とかじゃないですかよね？

だとすると、目の前の女性は、この適当な見た目で女神ってこと!?

ま、まあ……それを差し引いても、実際に神と思えない見た目、慈し^{いづく}みを含む声、佇^{たたく}まいやオーラ。

どれをとっても目の前の存在が神だということに分からせる。

黙って女神らしき存在をじっと見る。場に謎の緊張感が走っている。続く言葉を待つ。だが、女神は一向に口を開かない。

むむ……？ よく見ると、女神の目が点になっていた。

まるで、何が起きてるか分からないの？ とありえないものを見るような視線だ。

ん……？ 待てよ。まだようこそとしか挨拶していなくてぼけーっとしていただけぞ。分かるはずがない。

こういう場合って、神様のほうから状況を説明してくれるものだよな。

もしかして、この女神、見た目だけじゃなくて中身も残念なタイプなのかな？

そう思っていると、女神が我に返ったようにようやく口を開く。

「はっ……!? と、突然ですがあなたは死にました。しかし、あまりにも無難でつまんなさそうだったあなたの人生を見ていて、少し可哀想に思ったので、もっと楽しい人生が送れるように異世界に転生させることにしました！ 無双できるようにチートスキルも私から差し上げます。これまでも、この世界に様々な方々を転生者として送り出しましたが、どなたも国王や英雄や賢者になって活躍されたんですよ！ というわけで、あなたも思う存分無双ハッピーライフを送っちゃってください！」

んん……？ もしかしなくても、説明が適当なタイプの女神なのかな？ というか、可哀想とか勝手に決めつけるなっ！

はあ……いきなりツツコミどころ満載の出オチを食らって、パンチされたような衝撃を受けたか

ら、そつちに気を取られていたけど、俺死んだのか。

まあ、仕事での無理がたたって医者からももう長くないとは言われていたからなあ。仕方ないね。

平凡だけど、適度に充実した人生を送れていたと思う。

だから、別に転生なんて求めてない。

そもそも転生無双ってどうやってするんだろう？ どんなスキルや能力を与えてくれるかも教えてくれないし、何をすれば転生無双になるのかも不明だ。

魔王を倒してほしいとか、そういった使命もない。なぜ俺が選ばれたのかもさっくりとしか聞けないし分からないことだらけだ。

正直言つてこの女神、胡散臭いこと極まりない。

だが、女神は俺の訝しげな視線に気づいていないみたいで元氣よく確認してくる。

「では、今回の転生、承認ということでよろしいですね!？」

女神が晴れやかな笑顔を向けてくるので、間髪容れずに返事する。

「!? 嫌です。お断りします」

「え……？」

女神が動揺する。もしかしてこの人変な人？ とでも言いたげな表情だ。

こちらとしては、むしろ今の説明でなぜ承諾してもらえらると思つたのか知りたい。

「神の力で、私に対する信頼性を極限まで高めているから、拒否されることはないはずだけど……」
女神が顔を背けてボソボソ呟いていた。

こちらに聞こえないようにしたつもりだろうが、丸聞こえだからなっ！
しかも、やり方が物騒極まりない。

というか、神の力を使われても俺がここで疑念を抱くってことは、それだけ女神の説明がおかしいってことだ。この女神ある意味恐れ多いな。

「まず、無双なんてできるわけないと思いますし、興味もないです。俺が望んでいるのは『平凡な幸せ』のみ。でも、過ぎた力を持つっていると悪人や面倒ごとが群がります。とはいえ、もらえるスキルはもらっておいて損はないですし、あなたが無償でくれるのならいただきます」

こんな神に転生させられるのも怖いし、無双は丁寧に断っておく。

「えっ……!? ええ……分かりました。でしたら、無双するかはさておき、たくさんチート能力あげます。あとは、転生先でやりたいように楽しんでください！ それでは！ あなたに祝福あれ！」
女神が驚いている。逆に何に驚いているんだろう？ 断られると思ってなかったのかな、この内容で？ と思わなくない。

女神の言葉と同時に、俺の目の前が光り出す。

いや、結局細かい説明を何一つもらわないまま、勝手に転生させられようとしているんだけど!?
異世界のどこに転生するとか何歳になるとか。

「いやっ……ちよつと、まっ……テキストすぎー！」

そこで意識が途絶えた。

こうして俺の来世は始まりを告げたのだった。

第一話 事情の知らない転生

「おぎゃー、おぎゃー。うええええん」

再び目を覚ます。視界がぼやけていて何も見えない。

気づいたら、甲高い声で泣いている。

お腹が強烈に減っているみたい。

確か、女神から、『異世界に転生させてあげるから思う存分無双してください！』みたいな胡散臭いこと極まりない言葉を聞かされた気がするが、全部気のせいだったのかもしれない。

それはそれとして……ここはどこだろう？

俺は最初に、自分の顔を触った。若い。めっちゃもっちりしている。視覚はまだぼんやりしたまままだが、触覚はかなりしっかりしていた。周囲の音もよく聞こえるし、聴覚もはっきりしているようだ。

だんだんと視界がクリアになると、おそらく二十代前半の男女二人が俺の顔を覗き込んでいるのが分かった。

どっかの少女漫画にでも出てきそうな王子様風の金髪青眼のイケメンと、赤髪ロングの綺麗な女の子だ。

「ああ、ああ、あああああ!!」

なにこの美男美女……!! と言ったつもりだったが、上手く言葉として発音できなかった。さすがに喋るのは難しいか。

「おお、ラインハルトがこつちを指さしたぞ。パパだよー」

この人がパパか。お世話になりそうだし、満面の笑みで媚を売る。

「ああ、あああ……」

よろしく願います……と、言っただけだ。それにしても……どうやら俺は本当にどっかの家庭の子どもに転生してしまったらしい。やってくれたねえ、あの残念そうな女神。

チートスキルも本当にもらえているのだろうか？ まあ、どんな強力なスキルであれ俺に無双なんて度胸のいることできるわけないんだけど。

そんなことを考えていると、赤髪の女性と目が合った。

「ふふ、もう、かわいいわね」

「あう？」

金髪の男性がパパって言うていたし、こつちがママか。

「そうそう、あたしがママよ？ ……って、この子、あたしから言う前に聞いてくれたわよ？ まさか言葉を理解してるのかしら？」

「なに？ 天才じゃないか。さすが、俺たちの子どもだ」

あ、やつべ。うっかり声に出してしまった。

まあ、でもこの程度なら偶然反応が噛み合ったってことで誤魔化せそうだ。
これ以上、ボロだけ出さないようにしないと。

「ああー」

すみません。よく分かりません……という意味を込めて、適当に声を発した。
目立った行動はなるべく避けておきたい。

「おおっ！ やつぱり理解しているみたいだな。もしかしたら、神童かもしれない」

「ふふ。これは今後に期待できそうね」

変に反応したのが、裏目に出してしまった。いや、これは単に、うちの両親が親バカなだけか？ そんなことを考えながら、首の向きを変えると、ふと部屋に並べられた家具が目に入った。

やたら大きくキラキラしていて豪華だ。

……いや、てか、ん……？ やつぱり、豪華すぎない？ 明らかに普通の家庭ではお目にかかれ
ないような調度品類。

あのボンコツ女神め。どこに転生するとか教えてくれなかったから、かなり高貴な身分のところ
にいきなり飛ばされて、今すごい困ってるんだけど……この先どうなってしまっただろう？

だが、赤ん坊の状態で深い思考ができるわけもなく……

俺はいつの間にか眠ってしまったのだ。

「ぼけーっ」

転生してから一カ月が経過した。

夢のような時間が流れていたもので、本当に夢かと思いい、覚めるまで待つかとぼーっとした日々を送っていた。

ふっ。どうせこの体では何もできない。決して、幸せすぎて思考放棄したわけではない。周りの人たちの生活を観察したり、母親の話を聞いたりして情報収集だけは欠かさずに行うようにしている。

そんなふうなのんびりしていたら、両親の会話が聞こえてきた。

「ふふっ！ ラインハルトったら。最近の口癖はぼけーっらしいわよ！ 可愛すぎないかしら？」

「そうだなあ。なんとというか、天才なんだなあ……うちの子は」

はっ！ 俺がぼけーっしてしている間にまたしても親バカの化け物が生まれている気がする……まあいいか。

それはそれとして、あまりに自然に両親の話を聞けたから、気にしていなかったが、俺はこの世界の言語をすでに結構取得している。

しかも、赤ん坊にしては、視覚や聴覚、理解力なんかもかなり高い。

物覚えの悪かった前世の頃と違って、記憶力も良いし、これって結構異常なのでは？ これも女神の贈り物なのかもしれない。

この分だと、異世界におけるチート以外にもなんか色々余計なものまで贈られてそうで怖いんだけど大丈夫だろうか？

何はともあれ、こうして異世界での生活にも少しずつ順応し始め、自分やこの家のことについて知ることができたので情報をまとめてみた。

今知っているとこで言うと、まず今世の俺の名は「ラインハルト・ラッキー」というらしい。とてもキラキラしている名前に生まれた。早くも名前負けしそうで、胃が痛い。

そんな俺が転生したここは、ハワード王国というそうだ。

そしてなんと、父のエドワードはこの国の王族を離脱した元第七王子。隣国との戦争において功績を上げて、爵位と広大な領土を与えられたあと、王家から離れて公爵家になったらしい。

この国の貴族位は上から順に、大公、公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵の六つ。その中でも、基本的に大公領は独立した国とみなす場合が多いため、王族の部下にあたるのは、公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵の五つである。このうち、公爵の称号を得られるのは、王族に繋がる血を持つ者に限られている。つまり、我が家はほぼ最上位の階級だ。やってんねー我が家。

その他、世襲制ではないものの、一代限りの準爵位として戦争などで武勲を上げた人になる騎士爵、官僚など王宮で働く人たちがなる名誉男爵などがあるようだ。

今の国王である、セオドア・ハワードは父の兄。会ったことはないが、俺の叔父にあたるそうだ。ぶっ飛んでる。これ絶対あの女神の仕業だね。転生前にちゃんと説明しろと思わなくない。

父に王位継承権があるため、一応、俺にもあるみたいだけど、あまりに荷が重いので、それ以降の話は耳を塞ぎ、聞かなかったことにした。

ここまで詳しい話を知れたのは、母のおかげだ。

父や母と仲のいい貴族たちがたくさん面会に来るため、その度に母が俺に説明してくれる。近くに絵本があるにもかかわらず、特に読み聞かせをするわけでもなく、政治関係の小難しい話をしてくる母上。変な人々とは思うけど、おかげでかなりこの世界のことを理解できたと思う。

生後一カ月で寝返りも打てない身からすると、手に入れられる情報はそれくらいだ。家の外の子はまだ知らないし、この世界が日本とどれくらい違うかもまだ分かっていない。

それから気になっているのは、魔法の存在。

母や俺の世話をしてくれるメイドさんが照明や温度を魔法で調整している様子をちらほら見かけた。

今はそれを眺めることしかできないけど、そのあたりも知りたいと思う。

ちなみに、なぜか分からないけど母もメイドも俺の「あーっ」とか「ほけーっ」という発声だけで何を伝えたいか理解しているみたいだった。俺としては、これも魔法と同じくらい不思議に思っている。もしかしてエスパーなのかな？　なんて思っているうちに、徐々にまぶたが重くなってきた。

考え事をしすぎたせいかも。むにゃむにゃ……すぴーすぴー。

あつという間に一年が経過し、ついに歩いたり、本を読んだり、色々なことができるようになった。

「ふむふむ、おお、なにそれ？」

今は、さらなる情報収集をしようと魔法の本を読んでいるところだ。

どうやら、魔法は感覚器官の一つである魔力器官によって生み出されるエネルギーらしい。他の臓器と同じように個体差はあれど、この世界の人間なら誰でも持っている。ただし、魔法は自分で意識して魔力を体内に巡らせないと使えないため、練習が必要みたいだ。

魔法には区分があつて、基本属性魔法、特殊魔法、神位魔法に大別される。

基本属性魔法は人によって使える属性に限りがあるとかではなく、鍛錬次第で全種類の魔法を使うこともできる。属性は、火、水、風、光、闇の五種類。

そして、その上位互換として、上級属性魔法や複合魔法がある。

上級属性魔法は、植物、土、水や雷魔法など基本属性以外の魔法で、複合魔法は二つ以上の属性を合わせて異なる能力の魔法を生み出す技術だ。

たとえば水と風魔法を合わせると台風魔法、水と光魔法を合わせると聖水魔法になる。

魔法は、日本の科学と同じように、日夜盛んに研究が行われていて、新しいものが日進月歩で生み出されているらしい。

自分がどんな魔法を使えるのか今から楽しみだ。

約二年が経ち、さらに多くのことができるようになった。

最近では、両親に協力してもらいながら魔力器官を使いこなす訓練なんかも始めている。もはや俺は完全に夢だと思いうことを諦めて、人生を謳歌おうちかしていた。

そんな俺は今、新しい生命の誕生の場に立ち会っている。そう、弟が生まれたのだ。「おぎゃーおぎゃー」

か、かわいい……

弟の名前は、ラリーだ。

母上と同じく髪色は赤で、くりくりした透き通るような青い目をしている。うん、可愛すぎる。ちなみに、俺は父上と一緒に金髪に青い目だ。

本音を言えば、俺も赤髪に生まれたかったんだけどね。

戦隊ものだと大体赤はリーダーの色だし、ヒーローっぽいという感じがしたから。

どうやら話を聞くと、赤髪は珍しいそうさ。

生まれた瞬間から特別なものを持っている弟を誇りに思うし、生まれてきてくれて本当にありがとうと思う。

さて、弟ができたことが嬉しすぎて、忘れかけていたが、俺の話もちよつとしよう。

まず、魔法がそれなりに使えるようになった。

まだコントロールはいまいちだけど、基本属性の魔法なら上級くらいまでの威力が出せるし、空間魔法や身体強化魔法、回復といった特殊なものも少し発動できる。これはおそろく神様からもらった能力のおかげだろう。

本来魔法を使えるようになるのは、この世界だと五歳で洗礼を受けてからだだが、なぜかすでに魔法を使えるみだだったとだんだん分かってきた。どうせこれも、あの女神のせいなのだろう。

体も成長したし、こけそうになることなく安定して走ることもできるようになった。身体強化を駆使すると、百メートル七秒くらいだ。

自分一人で動ける範囲が広がったことで、わずかな回数ではあったけど屋敷の外を見ることもできた。

父上が任されている公爵領は、家付近こそ田舎いなかみたいだけど、王都の一等地や重要拠点などを含んでいることもあって、とてつもなく広がった。

元王族とはいえ、ここまで広大な領地を与えられた父上っていったい何者なんだろう？

母上は知っているようだが、何も言ってくれない。どうやら父上は自分の過去や功績をあまり話しながらない人らしい。

王族の情報となれば、何かしらの本に記録がありそうだし、十歳になれば王立学校に通えるようになる。冒険者登録もできるようになるからその時に調べるのもありかもしれないね。



そして月日は流れ、五歳になった。

今日は洗礼の儀を受ける日だ。

「にーにー！ はやくー！」

俺は玄関から出ようとして、その前で呼ぶラリーに近づく。

「はい！ お前は相変わらず可愛いなあ。うりうり」
俺はというと、二歳の弟にブラコンを發揮していた。

前世で入院していた自分のもとに唯一見舞いに来てくれたのは弟だったから、その時の思い出がよみがえっているのかもしれない。

それにしても……俺のこれは完全に親バカが遺伝したな。まあでも、うちの弟は世界一可愛いから仕方ないことだよ？ そんなことを考えながら、俺がラリーの頬をつんつんしていると、プライツとそっぽを向かれる。ガーン……

「はっ……！ もしかして反抗期？」

「お前が構いすぎなだけだっ！」

「あいでっ！」

父上からツッコまれてしまった。

ラリーも「にーに……」と呟きながら、こちらにジトーツとした視線を向けてくる。

ど、どうやらラリーにちよつとウザがられているみたいだ。ほどほどにしておこう。

俺たちのやりとりを見ていた母上が、馬車の中から呆れながらも声をかけてきた。

「そんなところで戯たむれてないで、三人とも早く馬車に乗りなさい」

「はい」

俺たちは返事をして、急いで馬車に乗り込んだ。

馬車がゆっくりと出発する。

車内には、ふかふかな高級ソファに、真っ白な布に金色の薔薇ばらみたいな花の家紋しじょうが刺繍しじょうされた触り心地のいいクッションが置かれている。

初めて乗った時から思っていたけど、相変わらず豪華だ。

しかも、動いている時の振動が少ないのもすごい。

馬車つってもっと揺れる印象だったからとてもありがたかった。

少し屋敷を出たあたりで、俺は母上に尋ねる。

「ところで母上、今日これから行く教会はどのようなところなんですか？」

「そういえば、まだ説明できていなかったわね。今日行くところはこの国で一番歴史の古い教会。この王国ができる前から存在しているとされているわ。神話によると、神が人間に作らせた教会とも言われているところで、貴重な遺産や歴史的な書物が中にあるという話も聞くわね」

「へえー」

ほー。神と聞いて、あの転生前に出会った女神の顔が思い浮かんだ。

いやいや、世の中にもっとまともな神もいるだろう。そう信じるしかない。

俺が心の中で祈っていると、父上が言葉を付け加える。

「ちなみに今から行くところは、厳密には王国の領土ではないんだ。教皇は大公の爵位と自治権が与えられているから、実質的に教会がある地域は大公国なんだよ。名前はないんだけどね。強いて言えば、教会名をとってエベレスト大公国かな」

「へー。すごいだね」

「なんととっても、この大陸で一番、権威のある人物が住んでいるからね」

それほどまでにすごい人がいる場所っていったいどんな感じなんだろう。それなりの趣向を凝らした、大きくて美しい建物があるということかな。

俺が興味津々な様子で窓の外に目を向けると、教会らしき建物が見えてきた。

ん？ あれって……

「島？」

「そう、あの島こそが大公国。そして、エベレスト教会だ」

目の前に現れた荘厳で美しい島を見て息を呑む俺に、父上が教えてくれる。

しばらくその迫力に圧倒されていると、あつという間に島の入口に着いた。

だが、正面に人が集まっていて物々しい。

「あら？ どうしたのかしら？」

母上が不思議そうに首を傾げている。

母上曰く、いつもなら外に人が集まっていることはなく、落ち着いているらしい。だけど今は警

備が厳重で、空気も普段と違っている。

何かトラブルでもあったのだろうか？

そう思っていたら、警備の人に囲まれて一人のお爺さんがこちらへ向かってきた。

「……っ、あれは！」

父上がいきなり緊張した様子で居住まいを正し始めた。

母上もちよつと顔が強張っているような……？

お爺さんが俺たちの顔をそれぞれ見てから、口を開く。

「ようこそおいでくださいました。ラッキー公爵家の皆様方。私はこの教会の教皇、ベンジャミン・エベレストと申します」

驚いた。教皇自らお出迎えか。

やたらと教会に厳戒態勢が敷かれていたのも、父上と母上が緊張していたのもこれが理由かな。

「こちらこそよろしくお願います。しかし、なぜエベレスト殿が直々にここまで？」

父上がお辞儀をしてから、問いかける。

たしかにトップ自ら玄関先まで来るなんて普通はありえない。そもそも、教皇なんて直接会うことすら難しい立場の人のはずだ。

父の質問に、教皇が微笑みながら答える。

「一昨日の夜、神託が下ったのです。その内容は、『明後日、ラインハルトという少年が洗礼の儀に来る。丁重に迎えるように』というものでした。それで今日あなた方がここに来ることを事前に知ったというわけです」

俺の頭に、女神の顔がよぎった。

父上と母上が教皇の言葉を聞いて目を見開く。

「ふおっふお！ まあ、ここで話しているのも疲れるでしょう。ささ、我が主の客人ですので、遠

慮せずにこちらへ」

俺たちは、教皇に先導してもらいながら、島の中へ入る。警備の人たちが、周りにも付いてくれているようだ。

教皇に案内されている状況なだけあって、周囲から俺たちに好奇の視線が注がれて痛い。

少し気まずい思いをしながら、島にある教会の中に俺たちは入ったのだった。

教会に着くと、俺たちは大きな広間に通された。

中央に美しい男性の彫刻があり、その近くに七体ほど同じような人型の彫刻が並んでいた。よく見ると、その中にあの女神に似た彫刻もある。嫌な予感は大当たりと言ったところかな？

俺が彫刻を眺めていると、教皇が話し始める。

「こちらは本館の洗礼の間でございます。本日は特別な状況での洗礼ゆえ、ここで行わせていただきます」

「教会にこのようなところがあるのですね。私の時は北館の洗礼の間でしたよ」

「あたしは南館だったわ」

父上と母上が不思議そうに言うと、教皇が詳しく説明する。

「そうですね。この教会では、身分ごとに使用する洗礼の間が違います。王族は北館、その他の貴族は南館、平民は東館、孤児や教会関係者は西館、そして、教皇や大司祭、神託があった方は本館という形ですね。私が教皇になってからは、本館で洗礼の儀を行ったことはないのです、私もかなり緊張しております」

その言葉通り、教皇の手は少し震えていた。

質素なつくりの部屋の前で足を止め、教皇が振り向く。

「申し訳ないですが、ここから先は私とラインハルト様しか入れません」

「分かりました。ラインハルトを頼みます」

父上が教皇にお辞儀をして、俺を送り出す。

「かしこまりました」

部屋の中を見ると、中央のテーブルに石板のようなものが置いてあった。

「それでは、これより洗礼の儀を行いたいと思います。この板は、私が用意させていただいたステータスボードです。儀が終わったら、差し上げます。ひとまず、ラインハルト君はここに手をかざしてください」

「はい」

指示された通りに手を載せると、教皇が何やら唱え始める。次の瞬間、眩い光が俺を包んだ。

光が収まり、目を開けると……

そこには、正座して謝り続けている女神と、さつき見かけた彫刻と同じ見た目の男性がいた。

なぜか男性は「なにを、やっつとるんじゃこのバカタレがー！」とブチギレていて、それを六人ほどの人たちが遠巻きに眺めている。

どういいう状況だろう？

俺を転生させた女神は、ひたすら「すみません、すみません」と謝り続けている。もしかして俺への適当な対応がバレて叱られているとか？

そんなやりとりの最中に来たからか、誰も俺に気づいていないみたいだ。

来て早々、気まずすぎて帰りたいと思った。まあ、見ている分には面白かったりするんだけど。俺が手持ち無沙汰のまま突っ立っていると、エルフの少年がこちらに目を向ける。

「創造神様、ラインハルト君が来ました」

その時、エルフっぽい見た目の少年が男性に声をかけた。

「だいたいお前は昔っから」

だがその声も男性には聞こえてないらしい。

説教が続いている。

「創造神様、創造神様！」

「そんなんだから……！ ん?? おおっ……！ ラインハルト君。そういえば君を呼んだんだってよく来たね」

創造神と呼ばれた綺麗な顔立ちの男性がこちらに笑顔を向ける。

歓迎してくれて嬉しいという気持ちが半分、説教していたままのテンションで話しかけないでという気持ちが半分だ。

「というか、呼んだんだって……忘れないでほしい。」

「ぶっ……」

先ほど創造神を呼んだ小さな可愛い男の子が突然噴き出した。黄色の髪に青い目。背中に純白に羽が生えている。隣にもう一人、瓜二つの見た目の男の子がいた。双子なのかな？

まあ、可愛さではうちの弟が負けてないけどね。

「そりゃあ、君の弟君には負けちゃうよ」

ギクッ。

もしかして心を読まれているのか。

「そうそう。だから、心の中で早口で色々言っているのが面白くて」

一瞬、頭が真っ白になった。

そんなの知らなかったから、だいぶ失礼なことを言ってしまったかも。

「……ああ、そう警戒しなくてもいいぞ。我らはそんなに、器が小さいわけではないからな。さっきこいつを叱ったのは、見過ごせないやらかしがあったからだ」

創造神が少し困った顔をした。

続いてエルフの男の子が話を続ける。

「とりあえずいきなり来て困惑しているだろうから、簡単に説明するね。多分薄々気づいているだろうけど。ここは君たちの世界で言うところの神界というところだね。今は君の魂だけをここに呼んでいる状態ってわけ。それからここにいる神様だけ……」

そう言って、その場にいた神様について教えてもらった。

創造神はマテリ様というらしい。それから俺を転生させた女神の生命神ライフ様、ここで初めて

会う魔法神ホーマ様、武神スキル様、鍛冶神クラフト様だ。

本来なら全部で八柱いるみたいだけど、知識神ノート様、芸術神キャンパス様、遊戯神プレイ様は不在みたいだ。

全員の名前を聞いたところで、マテリ様が口を開く。

「さて、自己紹介も済んだところで、本題に入らせてもらおうよ。実は、君を神界に引き留められる時間は長くなってね」

「はあ、分かりました」

転生前に教えてもらえなかったステータスのことか、ようやく聞かせてもらえるのかな。

俺がそう思っつて、話を聞こうとすると、想定外の話が飛び出した。

「単刀直入に言おう。このバカが君に力を与えずでしまったせいで、君のステータスがとんでもないことになってしまっつてな。ここに呼んだのは、洗礼の儀が行われる今日を境に君が亜神あじんになったことを伝えたかつたからなんだ」

「うう……すみません」

女神が今度は俺のほうを向いてペコペコ頭を下げている。

「えーと、ステータスはまあいいんですけど、亜神あじんっていろいろのは？」

聞き慣れない言葉が出てきて、俺は思わず聞き返した。

「ああ、まずはその説明からだね。ところで、ラインハルト君はこの世界で神に一番近い存在ほどの生物か知ってる？」

「エンシエントドラゴンですよね」

屋敷にいる時に本で読んだことがある。エンシエントドラゴンが神様の眷属という話は、この世界では常識的な話だ。

「ああ、そうだ。あれは元々、監視用のために私たちが地上に遣わしたものだ。神がそのまま地上に干渉するのは危険が伴う。だから、我々の眷属に神の力の一部を分け与えて配置することで、均衡を崩すことなく見張ることができているわけだ」

なるほど。人間や他の種族の生物が地上を荒らさないために監視を付けているのか。

「そう。それでここからが問題なのだが、今の君はそのエンシエントドラゴン以上の力を持つてる」

「へ？」

俺が困惑しているのも構わずに、マテリ様が話を続ける。

「元々君を異世界に転生させた理由は、君が徳を積みすぎたせいで、地球に再転生できるステータスの基準よりも君のステータスのほうが高くて、地球上にもう一回転生することができなくなっつてしまったからなんだよ。その代わりに、別の世界に転生してもらい、少しでも優遇しようと思つたんだが、そこで問題が生じた。ライフが与えるはずだつた以上の力をラインハルト君に付与してしまつたんだ。本来は転生時に説明するべきだつたのだが、こちらの不手際ですまない」

マテリ様は深々と頭を下げる。

「……そういうことだつたんですね。でもマテリ様が悪いわけではないですから」

「いや、部下のミスは上司の責任だ。本当にすまない」

マテリ様の言葉を聞いて、この人はいい神様だなと思った。

さっき怒ってたのも、部下への愛情の裏返しかもしれない。

マテリ様がほっと胸を撫で下ろす。

「そう言ってもらえるとこちらとしても助かる。教皇に神託を出したのも、このことをいち早く伝えるためにこつちの世界に来てもらおうと思ったからだ。とはいえ、何かしてほしいことがあるというわけではない。今まで通り、自分の生活を満喫してくれたらいい。だけど、力の加減には気をつけてほしい。うっかりこの世界を破壊できるくらいのパワーを今の君は持っているからね」

ん？　なんか最後にすごく物騒な話が聞こえたんだけど。

俺が何かを言う前に、魔法神のホーマ様が笑いながら言った。

「細かいステータスはあとでボードで確認してみるといい。このあと、地上に戻った時には、もう君の種族は神族となっているはずだ。少しでも安心してこの先の生活が送れるように我々の加護も与えてある」

「まあ、さらに強化してしまったかとも思わなくないが、君なら大丈夫だと思っ」

……言い方が大丈夫なように聞こえない。不安だ。

ドワーフの見た目をしたおじさんの鍛冶神クラフト様も口を挟む。

「肉体も不死になってるが、大丈夫だろう」

んん？　なんか、補足程度で出しているいい情報じゃなさそうなこと聞いたんだけど!?

俺がそう反応しようとしたその時、光に包まれた。

「もう時間が来てしまったみたいだね。なんとかこちらからの伝達事項は話しきれてよかったよ。

あとは、この世界を存分に楽しんできてくれ」

創造神様が言うと同時に、光が一層強くなる。

いや、こっちはまだ聞きたいことがあるんだけど……

「いや、ちよつと。まっ……適当すぎだつてばー!」

つて、デジャヴじゃねえか。

目を開けると、元いた洗礼の間に立っていた。

ふと横を見て、俺は驚く。

先ほどまで俺を案内してくれた教皇が平伏していた。

俺は教皇に話しかけようとするけど、衝撃で上手く言葉が出ない。

「ど、どうしたんですか？」

なんとか言葉を絞り出して尋ねると、教皇が顔を上げた。

「あなたは神なのですよね」

え？　巫神のステータスってそんな簡単にバレるの？

「なんで分かったんですか？」

俺はちよつと警戒しつつ聞いてみる。

「曲がりなりに聖職者の端くれですからね。あなたのその神々しいお姿を見て一目で気づきました」

なるほど。でも、これはまずいかもしれないな。教皇以外にも気づかれている可能性がある。

「おそらく私以外にも、ここにいる半分くらいの者が気づくと思いますよ。それほどまでに神に仕える者にはそのオーラはすさまじいのです」

「そっか。それほどまでに感じ取れるものですね。もつとも、俺も自分自身が神だということを知ったのですが。それより顔を上げてください」

教皇が顔を上げる。

「あの」

そして、少し言いづらそうにしながら教皇が口を開いた。

「どうしました？」

「私は……いえ、私たちにとっては神に近いあなたも信仰対象にしたいと思っています。つまりあなたを保護したいのですが」

言わんとしていることは分かるが、ちよつと受け入れがたいな。

“保護する”と言えば聞こえはいいが、ようは監獄みたいところに軟禁すると言っているのと同じだろう。

まあ、悪いようにはされなれないと思うし、王位継承権を持っている公爵家の嫡男に手を出すまではいかないだろう。そんなことしたら、王国を敵に回すからだ。

俺は教皇を正面から見据えて、首を横に振った。

「……それは無理です。信仰対象として見られるのも嫌ですし」

ここの答えは有耶無耶にするべきじゃないと思つて、はつきり話す。

万が一保護されて監禁でもされたら、ここの建物一帯を吹き飛ばしてしまいうだ。神々もその力を持つて言うて言つてたからね。

「しかし、私は心配なのです。あなたが良からぬ輩に狙われるんじゃないかという。いくらあなたが公爵家の嫡男で守られているとはいえ……」

まあ、教皇が心配するのももっともだ。

万が一、神に近い存在が傷つけられる、最悪暗殺されるということがあつてはならないからね。

まあ、不死になつてるといふ話らしいので、ちよつとやそつとでは死なないとは思うけど。でも、ここでそれを言うと、より厄介なことになりかねないので、伏せておく。

「んー。教皇がそう思う気持ちは分かります。実際狙われることもあるかもしれません。だから、その懸念を払拭できる何かを考えるつもりです。なんてつたつて神ですからね。少なくともただの人間より頑丈なはずですし」

根拠のない発言ではあるが、自信満々に言う。

「……それもそうすな。少し過保護だったかもしれない」

ええ……今の雑な感じで信じるんかい！ ま、まあ……納得してもらえたようでよかった。

「では、そろそろ家族のもとに戻つてもいいですか？」

「おお、ああ、そうでしたな。ご家族も心配でしょうし、戻りましょうか」
なんとかこの場合は凌ぎきれたようで一安心。

教皇にとつて、神の言葉は絶対のものなのかもしれない。
反論されていたら、ボロが出ていてもおかしくなかったからよかった。

「では、ステータスを見せてくれ」
洗礼の間から戻ってきた俺に、父上が早速言う。
今いるのは、ステータスを確認するための小部屋だ。

この世界では、他人のステータスを一方的に知ることができないようになっており、本人から許可を得る必要がある。だから、家族にステータスを共有する場合でも、こういうセキュリティが万全な場所で開示するのだ。

この小部屋も洗礼の儀を受けた者の家族しか入れない。

ここでは、家族がステータスを確認して、どこまで世間に開示するか相談したり、どういった仕事につくかを考えたりする。

「分かりました。ステータスオープン」

俺は父親に促されるまま、ステータスを開示した。

教皇からもらったステータスボードにステータスが表示される。

名前	ラインハルトIIラッキー
種族	神族(見習い)
称号	ラッキー公爵家嫡男 神童 人類を超越した者 巫神 神の愛子
基礎能力	測定不能
日常生活	知力A 器用さB 体力A
武術	身体操作S 体術S 剣術S 槍術C 弓術B 棒術E 投擲術D 魔力操作S
魔法素質	
基本	火魔法S 水魔法S 風魔法S 光魔法S 闇魔法S
特殊	召喚魔法 身体強化魔法 従魔術 鑑定魔法
神位	空間魔法X 時間魔法X 結界魔法X 創造魔法X 破壊魔法X
加護	創造神 知識神 魔法神 武神 鍛冶神 芸術神 遊戯神 生命神

今さらながらとんでもない能力の高さと量だ。

ほんと何やってくれたんだろうねえ、あの女神様……

「い、今のはいつたい。も、もう一度見せてくれ」

ほら、父上めちやくちや動揺してるよ。

まあこれは、面白半分で事前に忠告しなかった俺のせいでもある。

部屋が静寂に包まれる。



さっきまで暖かった空気が、一気に冷えきって緊張した雰囲気は俺たちの間に流れ始めた。俺は言われるがまま、もう一度ステータスを見せる。

当然さっきと内容が変わるはずもなく、みんなポカーンとしていた。再びステータスボードを開くと、母上が顎に手を当てて言う。

「ええーっと、どうしましうかねえ。とりあえずあなたの情報についてはいったん保留にしましょうか」

「そ、そうだな……公表は別に遅れてもいいし、わざわざ全部出す必要もないな。しかし、そうかこれで戻ってきてからの教皇の様子がおかしいのも腑に落ちた」

「ははは。ご迷惑をおかけします」

俺は父上と母上と困った顔をしてお互いに苦笑した。

「にーさま、すごーい！」

状況を理解しきれていないラリーだけは、「すごーい！ すごーい！」と無邪気に喜んでいる。

この様子が見られたなら、ステータスが爆盛されていてもいいかという気持ちになる。

「そうだな」

「そうね」

ラリーのおかげで、冷えきった空気が少し和らいで暖かくなった。

ステータスの確認が終わると、教皇に言われたことを共有してから教皇のもとに向かうのだった。

教皇と再び合流すると、父上が早速提案を持ちかける。

「ラインハルトから話は聞きました。それで、ぜひこの教会と同盟のような関係を結びたいと思っているのですが」

ステータスを見せたあと、俺は父上にすべて話した。

通常、教会が特定の貴族を支援するのはありえない。

だが、俺が神だということが知られていて、保護したいという申し出があると教えたところ、父上が、教会がこちらとの関係を強めたがるんじゃないかと言いつつ出した。そしてそれなら、こちらからの誘いに乗ってくれるんじゃないかという話になったわけだ。

もちろん、ここで関係を強めるのは互いにメリットがある話だ。

俺たちの目の前にいる教皇と二人の枢機卿すうききょうが首を傾げる。

「同盟……ですか？」

「はい。こちらのお願いは、あなた方が持っている情報の共有。代わりに、私たちはあなた方の後ろ盾になり、公爵領での布教のお手伝いもできればと考えています。王国内に布教しやすくなると考えると悪くない話だと思うのですが」

「情報ですか……？ 具体的には？」

「んー。そうですね。できれば俺の暗殺に関する情報があると嬉しいですよ」

俺が答えると、教皇が目を見開いた。

先ほど、教皇は「あなたが狙われないか心配」と言った。

つまり、俺を狙いそうな輩に心当たりがあるのだろう。それから、現状手出しはしてこないが、今後裏で嫌がらせしてきそうになる人たちのことも……

なぜ彼らがそうしたことを知っているのかと言うと、教会という組織は、この世で一番情報が集まる場所と言っても過言ではないからだ。人の信仰心は強く、砂漠だろうが、極寒の地域だろうが、はたまたジャングルだろうが、信者は存在するし教会もある。だからここで、俺の安全を守るための情報をもらおうと考えたのだ。

「なるほど。ぜひとも前向きに検討させていただきたいと思います。公爵家に公爵領での布教をサポートしていただけることは、我々にとって願ってもない話ですが……」

公爵領の人口はかなり多い。ここで信者を増やすことができれば、教会の力をさらに強めることができる。

教皇が少し考えあぐねている様子を見て、父上はニヤツと笑った。

「分かりました。詳しい条件は、後日擦り合わせしましょう。とりあえず今後我々との関係を強めることに異論がないかどうかだけ確認させてください」

「それについては、こちらからもお願いしたいところです」

「その言葉が聞けて安心しました」

どうやら交渉成立のようだ。

色々あったけど、こうして洗礼の儀は丸く収まったのだった。

第二話 パーティと収穫祭

「帰宅帰宅！」

俺たちは教会から我が屋敷に帰ってきた。

帰る途中で、改めて公爵家を外から見ただけかなり大きかった。外は城壁のようなもので囲われているし、門番も立っているし、ほぼ城みたいなものだ。

屋敷の広さだけでなく、公爵家が直接治めている地域もすごい。

全部で三つあるが、そのいずれもが、非常に重要な役割を果たしている。

隣国との国境や魔物の領域と接している街、マッキンリー。

たくさんの人や物が行き来する交通の要所であるブロックスクエア。

そしてここ、領都のホワイトタウンだ。

公爵領は父上が王族だった時に、魔物との戦いにおいて多大な功績を上げ、王家を抜ける際に獲得した地域が大半らしい。

その分、まだ発展しきっておらず、他の地域に比べると技術や文化の発展は遅れているが、優秀な父上と部下たちによって急成長している。

直接的に父上が治めている三つの街以外は、役人を派遣して治めている。

公爵家に関しては、政務のほとんどをここホワイトタウンの屋敷で行っており、屋敷に常駐している役人も多い。

そのため、その人たちが生活できるように屋敷の周りに様々な店も並んでおり、家の敷地がちょっとした村状態になっているのだ。

俺が屋敷から出ずに耐えられているのも、こうした村のような屋敷のおかげだ。感覚としては村からあまり出たことのない少年みたいいな。

玄関に入ると、護衛のアルバートⅡロッシュが出迎えてくれる。

「お帰りなさい、ラインハルト様。そういえば、洗礼の儀でしたよね？ 今度は何をやらかしたんですか？」

「決めつけやめてね」

もう一人の護衛、マークⅡベルンハルトは不在のようだ。

二人には俺が動き回れるようになってから、遊び相手になってもらったり、剣術や魔法の練習の相手をしてもらったりしている。

「やらかしたにはやらかしたんですね？」

「うっ……」

「凶星ですか……はあ……もうすぐ社交界と収穫祭ですからね。ほどほどにしてください」

「ほどほどにやれたらやる。胃が痛い……」

俺はアルバートにあいまいな返事をしつつ、自分の部屋に戻るのだった。

◇ Side…エドワード ◇

屋敷に戻ってきたエドワードは、側近と一緒に社交界を控えるラインハルトに関して話していた。主にステータスの公表についてである。

洗礼の儀を終えたあとのパーティは、貴族の子どものお披露目会であると同時に、世間での子どもの評価が決まる場でもある。なので、その前に、貴族は世間に対して、子どもがどういった能力を手に入れたかを公表するのが慣習になっている。

だが、今回はラインハルトの能力が高すぎるため、安易に世間に広めるわけにはいかない。

「このステータス。さすがはエドワード様のご子息ですね」

「いやあ、周りに報告がほとんどできることがないなんて優秀すぎるね」

報告書を読んで少し困惑気味の側近の様子を気に留めず、エドワードは相変わらずの親バカぶりを発揮していた。能天気なエドワードの物言いに、側近は頭を抱える。

そもそも、ラインハルトの異常な能力には、女神ライフのミスだけでなく、エドワードも大いに影響しているのだ。

「戦場を舞い踊る血まみれの王子」という息子たちに言いたくなさすぎる超絶厨二な二つ名で呼ばれながらも、エドワードは公爵家になる前に様々な功績を上げ続けてきた。

その実績と人気から、王家から独立した今でも彼を王にという声が多い。公爵の位を与えられたのも、決して彼が現在の王と上手くやっていたからではない。むしろ王にとっては、彼は強力なライバルであり、それゆえ王子の時代には暗殺も考えたが、他の王子が次々に失敗していたのでやめたという経緯だ。魔法や武力で彼の右に出る者がいないし、奇襲は彼の従魔によって防がれている。毒や眠気などの状態異常は、加護によって効かない。つまり、事実上彼を暗殺することは不可能だった。幸い、彼は王などの存在に微塵の興味も示していなかったのもあって、個人的に仲良くすることで、上手く取り入れたのだった。魔法、武術、指揮……どれをとっても完璧にこなしてしまふ彼の高いステータスが、遺伝によってラインハルトに色濃く受け継がれている。

ちなみに彼は、この恥ずかしすぎる二つ名のせいで、いまだに自分の武勇を子どもに話せていない。

エドワードが宙を見上げながら、話を続ける。

「うーん。俺がステータスを公表した時も、結構大騒ぎになってたらしいけど、まさか、それよりすごいとはなあ。まあ、洗礼の儀を受ける前から魔法を使っていた時点で薄々そうかなあと思っただけだね。加えて、もうすぐ三歳になるラリーも年齢離れた聡明さや落ち着きがあるし、我ながらとんでもない子どもたちだよ」

「では、話を戻しますが、どこまで公表しますか？」

「とりあえず、開示できるところまで、開示してみてもツッコまれたらその時に考えよう。あとはよろしく」

そう言って、エドワードは思考放棄し、話を切り上げて部屋を出ていく。そのエドワードの背中を見ながら、側近は大きなため息をつくのだった。



パーティの日が迫る中、俺のステータスがとうとう世間に公表された。当然と言うべきか、世間の反応は大荒れだったみたいだ。

公表日の前に、父上は「まあ、ラインハルトなら注目が集まっても大丈夫だろう。なんてったって、俺の息子だからね」と言っていたが、要するにナゲヤリデスネ。

洗礼の儀で出会った神々くらいふわっとしている。

「なんで、俺の周りにはこんなに適当な人が多いんだろう？」

思わずぼやくと、アルバートが答える。

「仕方ないですよ。お忙しい方なのですから」

それ、絶対理由になっていないと思う。

ちなみに、護衛のマークとアルバートには、俺からステータスについて包み隠さずすべて伝えている。

さすがに専属の護衛に隠し通すのは難しいからね。

続けて、アルバートが話す。

「むしろ、公表する情報を棲み分けることに驚きました。基礎能力の開示は一切行わない。代わりに、魔法の素質については特殊と神位魔法を除くすべてを公表するという形式は開示しすぎかと思わなくないですが」

「まあ、俺もそれは思ったけど、ラインハルト様が才能あることは、前々から世間的に知られていたので、俺もそれは思ってたけど、もう一人の護衛のマークが口を挟む。

「それもそうですね。ふっ……！でも、今回の騒動で、また有名になりましたね、ラインハルト様」

それを言うな、というか、何笑っているんだよと思わずツッコんでしまう。

元々転生前には、あまり目立たないようにしたいと考えていた身だから、恐れていたことが現実になってしまった気分だ。

公爵家の嫡男として生まれた時点で諦めていたけど、今回の一件が完全にどめになった感じだ。しかも、俺と同じ年の子どもの中に、王族が二名、公爵家の者が三名、侯爵家の者が四名と上級貴族の子どもたちがたくさんいて、そのどれもが高い能力を持っている。そのため、より高い注目を集めてしまったみたいだった。巷では、「豊作の世代」と言われているのだとか。

今度のパーティでその全員が集合するとも聞いたし、なんとか穏便に済ませたい。何も起きないといんだけど……

そんなことを考えていたら、マークが俺を茶化す。

「まあ、そんなことより、参加するお嬢様方も期待しているだろうし、洋服もすっかり決めたほうがいいだろう！ こういう場合は、婚約者を見つける機会でもあるし。ラインハルト様にいい相手が見つかるといいな！」

こいつ……自分はモテるからって茶化してきやがって！ と思わず呆れてツツコミを入れる。ちなみにそー言うマークにも婚約者はいない。マークは侯爵家の三男で俺より五歳上。護衛というより、もはや俺の兄のような存在だ。そのため敬語も使っていない。

ちなみに、アルバートは年齢というより、自分のポリシーに則_{したが}って敬語で話している。

「別に。なんでお前は父上に注意されなくて、俺はこんなにも頻繁に注意されるのかを考えていただけ？」

「日頃の行いだろ」

「大ブーメラン」

「うっ……！」

まさかカウンターを受けるとは思っていなかったみたいで、マークが呻く。

マークもそこまで日頃の行いは良くない。

「へへっ！ ベーっだ」

普段いいように言い負かされることが多い俺は、勝ち誇った顔でその場から逃げ去る。

「あっ！ 逃げた！ そういう余計な一言がよくないんだぞ！」

「舌を出すのも、公爵家の子息として品がないですね。これは、パーティに向けて礼儀作法の教育

をせねば……」

「あー。ごめん、ごめんってば！」

マークだけでなく、アルバートも焚_たきつけてしまったみたいだ。

しばらく逃げていたが、アルバートに首根っこを掴まれて、俺は礼儀作法の練習をする羽目になったのだった。

「うへえええええ」

ようやくアルバートのレッスンが終わった。

何があつたかは思い出したくもない。

指導は厳しかったが、おかげで、服装、食事、礼儀作法、ダンスまで、マナーをかなり身につけられたと思う。

これなら、同世代の友人を増やすにしたって、婚約者や仲のいい貴族を作るにしたって、支障なくできるだろう。

パーティ会場にいる人たちは、表面上こそ全員に友好的だが、実際は自分にメリットがある人間との関係を構築するために集まっている。その基準には、地位、名声、将来性だけでなく、カリスマ性や性格、マナー、それから自分に興味を持ってくれているかなども含まれるのだ。

ただ、ステータスが高ければいいというものではない。

「貴族たるもの外見も磨かなければなりません」と母上も言っていた……まあ、母上は美容に目が

ないだけかしなければならないけれど。

それに、このパーティには貴族以外も参加する。おそらく、国王の方針だと思うけど、この国では、優秀な市民は積極的に特権階級に取り入れられ、パーティの招待も受けられる。そのため、著名な音楽家、料理人、画家など、平民でも様々な人たちがビジネスパートナーを求めてやってくるのだ。

商人たちは情報を求めにやってくる。また、貴族にとつては自分の領地の宣伝をする絶好の機会でもあるので、自分の領地で採れた食材や、食器、お土産などを積極的にアピールする者も多い。もちろん、ドロドロした貴族派閥争いもある。色々な側面を持っているのが貴族のパーティだ。

俺は婚約者探しももちろんだが、このビジネスパートナーに興味があった。転生して、情報を集め始めてから、この国の商売についてよく考えていた。

この世界の文明は発展が遅れている。食べ物や飲み物の種類も元の世界と比べるとかなり少ない。辛い、俺はイメージした物体を形にできる創造魔法を女神からもらっている。これを使って製品を生み出せば、一気にこの国を発展させることができる。だが、それだけでは意味がない。俺がこの先いなくなったら、また元通りになってしまう可能性があるからだ。

そうならないために、しっかりとしたイノベーションを生み出せる「環境づくり」と「人材」が必要だ。幸いにして地位と資金は豊富にあるから、新しいものを生み出せるコネクションを作っていきたいと思う。

いずれにしても、どんな出会いが待っているのか、俺は期待と不安の気持ちを両方抱えながらパーティの日を待つのだった。

あつという間にパーティ当日になった。

「皆様、本日は遠路はるばるお越しいたいただき、ありがとうございます。ささやかながら、おもてなしさせていただけますので、最後までお楽しみください」

父上が公爵領の代表として、挨拶した。

よっ……！ さつすが我が父上、キラキラオーラでまっぶし！ ヨイショ！

俺が心の中で持て囃している、父上がこちらを睨んだ気がした。もしかして気づかれた？

「顔に出てるからバレたんだろ」

俺の心を見透かしたかのように、同行しているマークが指摘する。

一応護衛っていう体で付けてもらったけど、俺のほうが強いから、いざという時は俺が守る側になるかな……なーんて。

いてっ。

そんなふうにしていたら隣にいたマークが俺の膝を蹴った。

「今俺に対しても変なこと考えてただろ！」

そんなに分かりやすい顔してたかなあ。

こっちの世界の人、察しが良すぎでしょ。

マークが気づくくらいだから、父上にもバレていそうだ。

父上の挨拶が終わり、パーティが開幕した。

マークと並んで待っていると、家族がやってくる。案の定、父上は俺の心の中の煽りに気づいていたようで、せっかく整えた俺の髪をわしゃわしゃしてきた。

その後、俺たちは全員で貴族への挨拶回りを始める。挨拶した中には、「豊作の世代」と呼ばれる俺と同じ年の人もいた。

残念無念、見事に全員男だった。

しかもみんな揃ってイケメンでいい人ばかりだった。

これで早くも目的の一つの婚約者探しがなくなってしまった。いや、別に期待していたわけではないけど、八人もいたら、一人くらい女の子がいてもよくない？

その子が婚約者に……みたいなのが、よくある流れだと思っただけに、俺は肩を落とした。むすー。

「残念だったわね」

俺が頬を膨らませていると、母上があっさりそう言った。

グサツ……心読まないで……

女神ライフはなんで転生前に恋愛運を上げてくれなかったんだ……

その後も挨拶は続き、商人や令嬢とたくさん話した。令嬢の中には可愛い人もいたが、こちらが公爵家ということもあってか、親に仕組まれたのか、露骨に媚を売ってくる人ばかりだったので引いてしまった。

まあ、商人のコネクションが築けたからよしとするか。

もっとも、俺が五歳だからいいように使えそうだと侮っている人もちらほら見かけたけど。そのあたりの対策はおいおい考えよう。あとは魔道具に詳しい人がいると嬉しいんだけど。

挨拶回りが終わり、俺とマークは人混みの中から抜け出した。

「はー。疲れた」

「ほい。お疲れ様」

マークが俺を労って、飲み物が入ったグラスを寄越してきた。

「ありがとう。ごくっ……ふー、染みるー」

「おっさんか」

「うるさい」

そのまま、俺たちはマークと一緒に休憩しようと外のバルコニーに向かう。

——ガチャ。

外に出ると、人影が視界に入った。

「あら？ 先客がいたみたいだ」

人影に目を凝らしたら、そこには俺の好みですごく可愛い……男の格好をした子どもがいた。俺が落胆したのに気づいたのか、マークが俺の肩を叩いて言う。

「……ぶ。あっはっは。お前ってほんとは誰かいな。あいであっ」

俺はマークを小突いてから、目の前の子に向かって頭を下げる。

「はあ。まったく……君、いきなり来てうるさくしちゃってごめんね」
「あ、いえ。大丈夫です。それより、邪魔になりそうですから戻りますね」
声だけ聞くと、中性的でかっこいい。

俺は室内に入ろうとする目の前の子を呼び止める。

「ああ。いや、別にいいよ。それより何をしていたの？」

「えっと、魔道具を分解して、ちよつと色々研究してたんだ。周りに人がいるとできないのでね」
「……魔道具だって!? それだつ……!」

もしかしたら、俺が求めていた人材かもしれない。

「君。素晴らしいね! よければ、少し話を聞きたいんだけど」

「あの……」

「いくらなんでも急すぎるだろう。相手が男だからってグイグイ行きすぎだつて」

「あの……」

マークが俺を制止する。

たしかに、目の前の子も困っているし、よくなかったかな。

「ああ、興味のある言葉が聞こえたから、つい……気分を悪くさせたらごめん」

「あー!」

「ん?」

「なんだ?」

何か言いたそうにしている目の前の子に、俺とマークが首を傾げる。

「僕……女なんだけど」

まじか……初対面でやっちゃまった……けど、よっしゃあああああ!

俺は焦ると同時に、やつとまともに女の子と話せたことに心の中でガッツポーズする。

「はっ……危ない危ない。うっかり声に出すところだった」

「声に出してなくても表情に出てるんだよなあ」

マークが呆れた様子で哀れんでくる。

「やめろその顔……女の子だとは思わなくて。その、俺の周りには男しかいなくてさ」

「いや、別にいいよ。慣れてるし。というか、特別女扱いされたいわけでもないから気にしないで

いいよ」

「そ、そっか」

ずいぶんサバサバした性格の子らしい。

少し面食らつて思わず当て馬のリアクションしてしまった。

「そういえば、自己紹介がまだだった。僕の名前は、ルイ＝フォート。フォート伯爵家の長女だよ。よろしく」

「フォート……代々研究者として名を馳せている一族か……どうりで」

「いやいや、伯爵とは名ばかりだね。実際は平民と変わらないよ。この通り、あまり貴族の礼儀も知らないのさ。ところで君たちの名前は? 見たところ貴族っぽいけど」